矢口徹也

女子補導団

日本のガールスカウト前史

（2008　成文堂　412p 3,500円＋税）

小玉亮子

少女たちがカメラに向かってならぶ集合写真に笑顔がみえる。今なら、公式の場であらたまって写す写真でも、笑顔でピースをすることも珍しくないが、まだ写真が日常でない時代の写真である。袴や着物姿、へちま襟の洋装の少女たちのセピア色の写真から、そう派手なアクションはないけれども、こぼれるような笑顔がみえるのは、たぶん、その場が彼女たちにとって楽しいものであったからだろう。そんな推測もあながち的はずれではないように思える、本書は、そういう写真の一つを表紙にした本である。そして、本書を読みすすめていくうちに、表紙の少女たちの笑顔に抱いた推測が、その場が少女たちにとって確かに意味のあるものであったという確信に変わるのは、評者ひとりではないのではないだろうか。

その場、とは、いまでは聞きなれない言葉である女子補導団である。本書のなかで、女子補導団は、ガールガイドの訳語であると説明されるが、ガールガイドという言葉もまた、耳慣れない言葉である。そして、ガールスカウトといわれてようやく、少しイメージすることができる。

これについて、本書の冒頭で、詳しくは、次のように説明されている。「世界的青年運動であるガールガイド・ガールスカウト運動がイギリスから日本に導入され、女子補導会、女子補導団の名称で活動を展開し、第二次世界大戦中の解散を経て、戦後はアメリカ式にガールスカウトとして再発足する」（１頁）。本書が検討するのは、この一連の過程である。この今では一般にあまり知られない、第二次世界大戦以前のこの団体を研究することの意義について、本書は、４点をあげる。

その１点めは、女子補導団の展開過程を追跡することによって、日本の女子教育史における宗教の持つ意味を検討することができる点である。宗教と教育というテーマは、近代においてその「分離」が中心的課題となってきたこともあって、重要なテーマでありながら、教育史において正面から論じられることの少ないテーマである。しかも、「女子教育と宗教」という課題は、日本でどれほど議論されてきたか、というと、これまで必ずしも十分論じられてきたとはいえないテーマであることは強調されていいのではないだろうか。本書が扱うのは、まさに、このテーマである。

日本語の社会教育という概念は、学校教育外の教育をさすものであるが、本書で興味深いのは、女子補導団という社会教育の組織が、キリスト教主義女学校から活動を始めたというところである。つまり、女子補導団を検討するということは、近代日本の女子教育におけるキリスト教主義に基づく教育が果たした役割に焦点をあてることともなり、近代日本が模索した新しい教育において、どのような人間像、女性像がもとめられたのか、その一つの側面を明らかにすることに寄与する。

ここでひとつの側面というのは、実は、本書の２点めの意義と関連する。というのは、本書が扱う女子補導団がきわめて階層性を持つものであるためである。女子補導団が活動をはじめた1920年代について、本書は次のように言う。「1920年代は、総力戦、科学戦としての第一次世界大戦を経て、都市に家庭が誕生し、女子中高等教育への要求も拡大しつつあった」（２頁）のであり、家庭を形成し、より高度な教育をのぞむような、そういう都市中産階級が勃興しつつある時代である。そういう時代に女子補導団は日本に導入された。このことは、女子補導団が受験競争との関係で、盛衰していくという本書の興味深い分析とも関連する。これまで、高学歴志向の問題は、立身出世をはかる男子の問題として論じられることが多かったが、本書では、女子の受験のために、女子補導団に参加する

小学生たちが減少していくことが論述されているのである。ここにおいて、都市中産階級の女子たちにおける受験が問題となるような階層の出現と、その階層における社会教育の展開という非常に興味深い論点が展開されている。

近代の社会教育に関する研究のなかで、女子補導団は、農村のそれではなく、都市型の社会教育であるという点で、近代の社会教育の一側面に焦点をあてたものであるが、しかしながら、そのことによって、これまで十分議論されてこなかった都市型女子社会教育を浮かびあがらせつつ、近代社会における階層問題にスポットライトをあてたという点で、本書の意義は大きいといえよう。

さらに、本書の意義は女子補導団と戦後教育との関係を分析した点にある。イギリスから導入されたガールガイドは、戦後になるとアメリカ式のガールスカウトとして普及することになる。これにCIE（民間情報教育局）も文部省も注目してその普及をはかったのであるが、その理由は、「そのグループワークの方法は、戦後教育改革期に日本の社会教育、青年教育の雛型としての役割を果たした」（２頁）からであると指摘されている。このように戦後の日本の社会教育の展開をみるために、そのモデルとして、女子補導団を位置づけることが３点めの意義である。

最後に４点めの意義として、戦後、新しい価値観、新しい制度のもとで、目指される女性観を女子補導団にみることができることがあげられる。戦後の「女性の市民としての資質と社会参加、同時に将来の家庭の担い手育成という課題」(２頁)を明らかにするための重要な資料を、女子補導団からガールスカウトにいたる女子教育観が提供してくれるのである。

こうしてみると、本書は、宗教と女子教育、都市型の女子社会教育、そして、戦後における社会教育のモデルと戦後の女性観という、諸課題に対して論じようとする研究であるといえる。

この本書自身が語る４点の意義に加えて、さらに、比較史という観点から本書の意義を考えてみたいと思う。というのは、本書では冒頭の第一章に、イギリスにおけるガールガイドの成立が置かれているためである。

もちろん、本書のテーマは日本の女子補導団の導入と展開の過程を検討することであり、第一章のイギリスにおけるガールガイドの成立過程は、日本の女子補導団を考えるための、本家イギリスでの前史という位置づけとなっている。しかし、実は、単なる前史以上に、この第一章があることで、日本での展開の特殊性を浮かび上がらせるものとなっている。この章があることで、日本での展開とイギリスでの成立を対比させることができ、それによってイギリスにおけるガールガイドと日本における女子補導団がそれぞれの時代に果たした役割の違いがクリアになり、まさに比較史的検討が可能になっているのである。

本書が扱うのは、20世紀初頭から半ばまでのほぼ半世紀である。20世紀前半は、世界中が大きな戦争に巻き込まれた時代である。繰り返された大戦では、国民国家という単位のもとに、同時に国民国家を創出し、維持するために引き起こされ、総力としての国民全体が動員された。そういった時代に、ガールガイド＝女子補導団は登場したのであるが、国民国家の創出との関係において、ガールガイドがイギリスと日本では、異なる歴史をたどったことが本書で明らかにされている。

第一章によると、少女のためのガールガイドのルーツは、ボーイスカウトにあり、それをはじめた人物が、ベーデン・パウエルである。彼のボーイスカウト運動は、彼が「ボーアの大軍に長期間包囲され、危機的状況におちいったとき、現地の少年を選抜して『見習い兵団』を組織した。少年たちは伝令、郵便配達、見張りなどに活躍したが、この経験は、彼自身も青少年に対し、訓練と責任を与える必要性を確認させた」ことがもとになっているという。イギリスにおけるボーイスカウト運動は、「大英帝国の担い手となるための勤勉性、また兵士となるための資質に係わる訓練を含み、青少年教育の興味関心と余暇の課題に対応する」(31頁）ものとして、マスコミの注視のなかで、急速に発展することになるが、この少女バージョンがガールガイドである。

「少年の場合の目的が『大英帝国』の勤勉な市民、兵士、労働者となる資質を求めたものに対して、少女の場合は、『大英帝国』の母であり、良き妻の姿であった」(43頁)。そして、この少女たちのガールガイドも、また、総力戦のもとで注目をあつめることになる。イギリスの「戦時の救護と支援に活躍した」ことによって、認知され、同時に、社会で活躍する女性という新しい女性像を示すものとなった。

これが、1920年代に日本に入ってくるのであるが、

イギリスと日本との違いは、日本では戦時の国民国家を支えるものとしての活動という側面より、むしろ、新しい女性像、新しい女性の教育という側面の方を強くもって広まったことが本書から読みとれる。日本では、キリスト教主義女子教育機関においてガールガイドが始められたが、それらの教育機関は、近代日本の学校制度が普及する過程でむしろ傍流となっていく。そして、女子補導団は、第一次世界大戦下で社会貢献へとシフトしつつ継続されるのであるが、第二次世界大戦という総力戦体制下では、キリスト主義女学校は弾圧され、女子補導団は廃止においこまれた。

イギリスから導入された時、ガールガイドは、日本の実情に合うように修正されてはいた。それはたとえば、イギリスのガールガイドにおける「神と王に忠誠を誓う」という契約が、日本においては、「天皇陛下に忠誠を誓う」と翻訳されたことなどに見ることができる。しかし、それでも、イギリス人が直接関与・指導することが多かった女子補導団は、日本ナショナリズムの教育機関として認知されることはなかったのである。

日本においてはそういった困難な歴史をもつ女子補導団であるが、本書で引用される女子補導団の記録の中に、「うれしい」「よろこぶ」といった言葉を見つけることはそうむずかしいことではない。本書における女子補導団の活動の分析からは、困難な時代ではあっても少女たちの新しい経験、楽しい経験が確かにあったことが、生き生きと伝わってくる。

日本という国民国家を総動員する総力戦の中では決して主流とはならなかった少女たちのための社会教育が、しかし、その場で生きた少女たちにとっては意義のあるものであった。そして、そのことが、戦後の女子社会教育のみならず、戦後の女性観の展開にも大きな役割をになうことになったことを、本書は確かに伝えるものとなっていると思う。

（こだま・りょうこ　お茶の水女子大学准教授）